

ぴよんぴよんキッズの子どもたちと Xmasコンサートを開催しました



**元気なぴよんぴよんキッズと
楽しいXmasコンサート**

12月12日(木) 信篤公民館の音楽室にてXmasコンサートを開催しました。昨年に引き続きぴよんぴよんキッズの元気な子どもたちと一緒に楽しく演奏することができました。



先日は、ぴよんぴよんキッズでステキな演奏をしていただき、ありがとうございます。初めてオーケストラの演奏を聴いて衝撃を受けた子、2度目でおちついて聴けた子、いろいろな子がいきましたが、彼らの心にはとても良い刺激になってまた少し、成長できたかと思えます。来年もまた、本物の生の音楽が聴けたらな・・・と思っていますので、その時はぜひよろしくお願ひします。

後日、市川子ども文化ステーション中央地区ぴよんぴよんキッズ大柳様よりお礼のお手紙をいただきました。

ちばマスターズ オーケストラの皆様

初めにオーケストラの演奏を聴いて衝撃を受けた子、2度目でおちついて聴けた子、いろいろな子がいきましたが、彼らの心にはとても良い刺激になってまた少し、成長できたかと思えます。

「うもり」序曲と《展覧会の絵》を指揮した。「キエフの大門」のドラが鳴り響くと、気の早いイタリア人の素朴な聴衆はもう拍手喝采の嵐。いつ曲が終わったのか分からないほどの大騒ぎとなった。翌日「まさか、誰もこなかっただろうな」と、チェリビダツケ。皆一斉に「誰も、行ってませーん！」

非音楽的な事柄が続ぎ、チェリビダツケはこのオーケストラと縁を切り、二度と指揮することはなかった。

講習会のあと、私はチェリビダツケが指揮する次の都市、ルガーノについて行った。ルガーノのスイス・イタリア地区放送局のオーケストラはかなり小編成である。曲はラヴェルの《クープランの墓》、ハイドンの交響曲92番《オックスフォード》、モーツァルトの《交響曲第40番》であった。練習はそれまで見たことも聴いたこともないような濃い内容であったが、講習会に出席したおかげでチェリビダツケが教えようとしていたことが少しづつわかるようになってきた。特にハイドンの素晴らしさ！耳が洗われるような新鮮な音楽とそれを具現していく棒さばきのみならず、ボディ・ランゲージとしての体全体の動きとその優雅さに眼を見張った。

こうして、私の「チェリさん詣で！」がハッキリとした目的を持って開始したのである。

CMO 常任指揮者 齋藤純一郎
(以下、次号)

大好評! 第4回

我が棒振り修業時代! 指揮者 齋藤純一郎

待望のポローニヤ講習会始まる
—チェリビダツケ師事ことはじめ

思いがけない筆記試験

ポローニヤでの講習会は、ポローニヤ歌劇場で座付きのオーケストラの協力を得て開催された。ポローニヤ歌劇場はイタリア屈指のオペラ座で、オーケストラは素晴らしい技量を持っていた。そして私にとってもはじめてのオペラ座での指揮となった。

1973年9月、私は、胸を弾ませて会場に向かった。ギャーオ！ 筆記選抜試験があるとのこと。シエナの時のように、オーケストラを振らせて決めるのだと思いついていた。試験会場に不安な思いで待っていると、チェリビダツケが現れて私を見つめ「おー、来たか？」という顔でニヤツとした。

筆記試験出題はもちろんチェリビダツケ。試験問題は2問。第1問は、「Commi から F-Dur に転調せよ」。第2問は、「オーケストラレシジョン」！ チェリビダツケが黒板にト音記号で、6/4拍子、13小節の旋律を書いた。調性はなかなか判断が難しい。問題は、その旋律をフルート1本、D管とA管とB管のトランペットそれぞれ1本。テノール・トロンボーン1本、A管のホルン1本、イングリッシュ・ホルン1本、ファゴット1本、3プルトのヴィオラ、チェロ2本でオーケストラレシジョンせよ、というものだった。第1問の転調は問題な

いが、第2問には即座に絶望した。作曲科出身ではないし、そうした訓練をしたことがない。チェリビダツケの意図は、どこにあるのだろうか？

見事に試験に落ち、後には振れることになったが、まず聴講生から始めた。講習会は始まったものの、初っ端からチェリビダツケとオーケストラが揉め、講習会は中止だというニュース。冗談じやない、せつかく来たのに！ 揉め事の原因は、ファゴット奏者が演奏会の練習時に無駄口をたたいた、と言うのがチェリビダツケの逆鱗に触れたのだった。当のファゴット奏者はおしやべりしたのではない。唇を舌でぬぐっただけだ、と反論していた……。さすがイタリア人！ ともかくなんとか事なきを得て、翌日には、講習会は再開された。

明快な理論・優雅な指揮

講習会の内容は、オーケストラを前にしての実践授業。そして、フェノメノロジ（現象学）の授業。大まかに分けると、テクニク（指揮の技術）、セオリ（音楽を現象学として捉え、論理的に考察すること）の2種類になる。

この時、私は初めて「現象学」という言葉を知った。まず一つの音の説明、そして二つの音の結びつきの説明・外に行ったり内に戻ったり、それが結びついて音楽は水平なもの（旋律的）である、と。そして、二つの音が同時に響くときの現象の話。すなわち、音楽はまた垂直なもの（和声の響きのつながり）である、と。



チェリビダツケの講習会風景

それを構築するのが、指揮者のなすべき一番肝心なことである。なかなかすぐには理解出来なかったが、写真のように、ほとんど伊賀の忍者部落の修行といった雰囲気の一ヶ月は、充実していた。

講習会の途中、チェリビダツケ指揮の演奏会が、イタリア共産党主催の見本市会場で開かれた。音楽をする条件はもとより政治的なことを含めて、全てがよほど意に反していたのだろう。「絶対に聴きにくるな！」というチェリビダツケの厳命が出た。

しかしもちろんみんなで行った。野外の会場には、赤や青の風船が溢れ、キャンディの甘い香りが充満し、アイスクリーム売りの声、仮設遊園地のメリーゴラウンドのごろごろと言う騒音。そんな雑音が聞こえる床板のぼこぼこした野外のステージでチェリビダツケは《こ